

## 入選

### 「子ども」から「大人」の側へ

東京都 大森第六中学校  
2年 小林律仁

この夏私は、広島に旅行に行った。久しぶりの旅行に、私の心は浮き立っていた。初めて乗る広島電鉄の路面電車は、都会的な広島駅周辺とレトロな車両が、街に独特な風情をもたらしていて、まるで非日常に迷い込んだかのような感覚だ。

乗車して数駅が過ぎた頃だろうか。停車駅で車掌さんが降りていった。そして乗車口のほうに回ると、車内に向かって「誰か車いすを乗せるのを手伝ってください。」と声を掛けた。見ると、外には車いすの方がいた。すると、「はい、私がやります。」と、乗車口のそばに座っていた女性がさっと立ち上がり、降りて行って手慣れた様子で車掌さんといっしょに車いすを持ち上げた。

周りの男性たちは、その女性と代わった方がいいのか悩んだようで、携帯電話を手に目を泳がせ、気まずそうにしていた。私は母に、「代わってきなさい。」と言われたが、子どもが出る幕ではないと思って、小声で「無理だよ。」と答えた。

手助けしたいという気持ちはあったが、身体を動かさなかった。なぜなら、人を乗せた車いすは重いので、子どもの自分では非力で危ないと思ったからだ。たが母が、「君よりもあの女性の方が小さいのに。」と言った。私は驚きに打たれた。そしてそのとき、初めて気づいた。私の体格も筋力も、もう大人と遜色ないほどに成長していたことに。

中学生になってからの1年半で、身長は約20cm伸び、私はもう「子ども」の見た目ではなくなっていたのだ。成長期に急激に身体が大きくなったことで、気持ちが追いついていなかったが、私はもうこういう場面で「大人」として行動すべき側になっていた。

私はドキドキした。自分にその役ができるかどうか。車いすはどのくらい重たいのだろう。落としてしまったら、どうしよう。でも、さっきの小柄な女性にできたのだから……。私の目は変わらず車窓から外の景色を追っていたが、頭の中はそのことでいっぱいになった。

しばらく様子を伺っていると、3つ先の停車駅で再び車掌さんが降りて、車いすの方が降りる準備を始めた。私は意を決して降車すると、「手伝います。」と声を掛けた。車掌さんは「助かります。」と言って、「車いすのこの下の部分を持ち上げてください。」と教えてくれた。「せーの。」で持ち上げると、確かに重いことは重かったが、それよりも自分が役に立てたことへの充足感が胸に広がっていった。

降車した車いすの方が、「ご親切にありがとうございます。」と言ってくれた。心が急に軽くなった気がした。勇気を出して行動して良かったな、と思った。思い返すと、私は小さかった頃、電車で座席を譲ってもらったり、エレベーターのドアを抑えてもらったり、見知らぬ大人からこうしたたくさんの「小さな親切」受け取って育ってきた。

今度は、自分が社会の中でそれをしてあげる番になったのだなと感じた。これからは大人として、今までたくさんの人から受け取ってきた「小さな親切」を返していきたい。